

主 題 : 世に來られた御子の偉大さ

聖書箇所 : ヨハネの福音書 3章31-36節

きょうはヨハネの福音書3章の締めくくりの部分となる、31-36節を中心に学んでみたいと思います。

ヨハネ3 : 31-36

「:31 上から来る方は、すべてのものの上におられ、地から出る者は地に属し、地のことばを話す。天から来る方は、すべてのものの上におられる。:32 この方は見たこと、また聞いたことをあかしされるが、だれもそのあかしを受け入れない。:33 そのあかしを受け入れた者は、神は真実であるということに確認の印を押したのである。:34 神がお遣わしになった方は、神のことばを話される。神が御霊を無限に与えられるからである。:35 父は御子を愛しておられ、万物を御子の手にお渡しになった。:36 御子を信じる者は永遠のいのちを持つが、御子に聞き従わない者は、いのちを見ることがなく、神の怒りがその上にとどまる。」

さて、きょうの内容に入っていき前に考えてほしい質問があります。皆さんはこの世に來られた御子イエス・キリストの偉大さを知っているでしょうか？普段の生活で、どれほどそのすごさに心を留めながら歩んでいるでしょうか？かつてこんな話がありました。3年ほど前に亡くなったイギリスのエリザベス女王が、ある日護衛官と一緒に自分の別荘の敷地内を散策していると、ふたり組の旅行者に出くわしました。近づいてきたその旅行者は女王に尋ねるのです。「どこから來られたのですか？イギリス国内でどんな場所を訪れたことがありますか？お住まいはどこですか？」と。女王は「私はロンドンに住んでいるわ。でもその丘の向こう側に別荘を持っているの」と答えました。旅行者は続けて「どれぐらいの頻度でここに來られるのですか？」と女王に尋ねます。女王は答えました。「ここには幼いころから來ているから、80年以上にもなるわね」。その答えを聞いた旅行者は少し考えた後、女王に言いました。「ここに80年も來ているのなら、女王にお会いしたこともあるんじゃないですか？」と。女王は「いいえ、私はないわ。でも、護衛官のディックは定期的に女王にお会いしてるのよ。」と答えました。それを聞いて驚いた旅行者は、護衛官の肩に手を回してカメラを取り出し、それを女王に手渡してこう言うのです。「この人と一緒に写真を撮ってください」と。もし目の前にいるのが、女王本人だと知っていれば、彼らの行動は大きく変わっていたでしょう。もし自分たちが女王本人と話しているのだとわかっていたら、その機会にもっと感謝していたでしょう。でも、ふたり組の旅行者はそれに全く気づきませんでした。たとえ実際に出会い、すごい人がすぐそばにいたとしても、本人がそれに気づかなければ、別のものに心が奪われてしまうという、そんな悲しい出来事になってしまうのです。

そして、これは今の私たちにも何ら変わりはありません。残念ながら、私たち自身も時にこの旅行者のように、偉大な御子に対して同じような態度を取ってしまうことがあります。少し考えてみてください。これまで私たちはいろいろな場面でイエス様のことについて耳にしてきて、知識として、情報としては持っているかもしれませんが。でも実際に、その偉大さを知っている者にふさわしい恐れや賛美や礼拝の態度をもって、今歩んでいるでしょうか？測り知れないそのすごさやその大切さを知っているのに、それ以外の別のものに心が奪われていないでしょうか？そのすばらしさを自分のこととして知っているからこそ、この方とともに歩めることに感謝してへりくだって、この方に従っていくことを喜びとしているでしょうか？どうでしょう？御子の偉大さを日々正しく覚えているでしょうか？思い返してみれば、バプテスマのヨハネはまさにそのように歩んでいた人物でした。2週間前に一緒に学びましたけれども、今回見る箇所の一つ前の節、30節のところで彼自身が「あの方は盛んになり私は衰えなければなりません」、こう言っていました。間違いなくヨハネは自分の姿を正しく捉えていただけでなく、御

子の偉大さに心を留めていました。だからこそ彼は、ますます自分が小さくなっていくこと、キリストが大きくなっていくことに喜びや満足を見出していました。だれに焦点があるべきなのか、だれがスポットライトを浴びるべきなのか、彼はそのことをよくわかっていたのです。

今の私たちにとって重要なことも、すべての中心である御子イエス・キリストの偉大さに目を留め続けることです。そして感謝なことは、みことばはその姿をはっきりと続きに描いてくれました。ヨハネ3：30の続きとなる31－36節、この部分を、ある人たちはバプテスマのヨハネのことばの続きではないかと考えています。30節の最後に米印がついていて、欄外に「バプテスマのヨハネの引用をここまでとしないで、36節の終わりまでとして訳すこともできる」と書いてあります。またある人たちは「いやいや、これは著者のヨハネが記したのではないか」と考えています。前者のバプテスマのヨハネのことばではないかと考えている人たちは、バプテスマのヨハネ自身が30節で言ったことの補足として、どうしてイエス様が盛んになって自分が衰えていかないといけないのか、その説明をここでしているのではないかと言います。後者の著者のヨハネが書いたのではないかと考えている人たちは、バプテスマのヨハネのことばを受けて、なぜイエス様が盛んになって、人は衰えていかなければならないのか、その理由を述べていると言っています。どちらなのかはよくわかりません。でも、どちらにせよ、ポイントは同じでした。ヨハネは私たちに、盛んにならなければならない、その測り知れない御子の偉大さについて、ここで教えてくれていたのです。

○世に来られた御子の偉大さ：三つの事実

もっと言えば、ここには世に来られたイエス・キリストに関して、特に三つの偉大な事実を見て取ることができました。世に来られたイエス・キリスト、この方がどれほど測り知れない、すごいお方なのかについて、三つの事実をここに見て取ることができます。ですからきょうはその内容を順に考えてみましょう。私たちひとりひとりがますますその偉大さを知って、この方の前にますますへりくだった者として変えられ、成長していく助けと励ましになることを祈っています。

1. 御子は天から来られたお方 31節

では早速、最初の事実から考えてみましょう。世に来られた御子に関する一つ目の事実は、御子は天から来られたお方だということです。もう一度、みことばを見てください。31節にこのように記されていました。「上から来る方は、すべてのものの上におられ、地から出る者は地に属し、地のことばを話す。天から来る方は、すべてのものの上におられる。」。いったいイエス様はどこから来たのでしょうか？その起源は下ではなく上にありました。この方の出身は地上ではなく、天にありました。これと同じ教えが福音書の中でも何度も繰り返されています。少し戻って3：13を見ると、「だれも天に上った者はいません。しかし天から下った者はいます。すなわち人の子です。」と言われていました。少し飛んでヨハネ8：23には「それでイエスは彼らに言われた。「あなたがたが来たのは下からであり、わたしが来たのは上からです。あなたがたはこの世の者であり、わたしはこの世の者ではありません。」と書いています。また、もう少し進んで16：28のところでも「わたしは父から出て、世に来ました。もう一度、わたしは世を去って父のみもとに行きます。」と言われていました。

ここにいる私たちにもみんなそれぞれに出身があります。北は北海道から南は沖縄まで、いろいろな地域の出身の人がいます。地元大阪の出身の人もあります。日本だけに限らず、アメリカやオーストラリアなど別の国の出身の人もあります。そして言うまでもなく、出身が異なるといろいろな違いも出てきます。服装や生活の仕方に違いがあったり、話し方や考え方が異なっていたりするのです。確かに私たちの出身はさまざまです。でも、どこまで行ったとしても、私たちの出身はこの地上の話であって、天ではありませんでした。また加えて、私たちにもみんなそれぞれに家族の歴史、起源というものがあります。私たちひとりひとりには親がいて、その親にはまた親がいて、その親にもまた親がいます。それぞれの家には代々受け継がれてきたいろいろな習慣や伝統、文化もあるかもしれません。また、その血の

つながりというものをずっとずっとさかのぼり続けていけば、みんな同じ始まりに到達します。すべての人が最初の人類であるアダムに結びついているからこそ、今の私たちも、彼の汚れや墮落した罪の性質を受け継いでいるのです。だれもがこの地に生まれ、生まれながらに罪や汚れに汚染されているからこそ、私たちが救われるためにはすべてのものが新しく上から御霊によって生まれなければなりません。私たちの起源も、どこまでさかのぼったとしても、この地上での話であって、天ではありませんでした。

私たちはみな、どこまで行っても地上でした。でも御子はそもそも違いました。キリストは天から来られた方でした。もともと上から来られたお方だからこそ、この方には私たちのように新しく上から生まれる必要はありませんでした。地から出るものは地に属します。地のことばを話します。地の習慣を持っています。でもこの方はもともと天に属しておられるお方だからこそ、天の習慣を持っておられ、天のことばを話されました。この地上に縛られていて限りのある私たち人とは違って、この方は永遠の御子としての天の権威を持っておられ、比べるものがない唯一無二の天の力というものを持っておられました。この方が天から来られたお方であるからこそ、まさにこの方こそすべてのものの上におられる、すべてにまさって偉大な存在なのです。別の箇所パウロもこんなことばを残していました。コロサイ1：15－18にこう書かれています。「：15 御子は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方です。：16 なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。：17 御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています。：18 また、御子はそのからだである教会のかしらです。御子は初めであり、死者の中から最初に生まれた方です。こうして、ご自身がすべてのことにおいて、第一のものとなられたのです。」と。

果たして私たちは、そもそも第一のお方であるキリストの姿を正しく覚えているのでしょうか？口では「イエス様はすべてにまさって偉大なお方です」とか、「何よりも大切な存在です」と、幾らでも言うことはできます。でも実際は、そんなキリストの姿を知っている者にふさわしい生き方をしているのでしょうか？私たちはすべてを造った第一のキリストを、どんな時も第一として認めているのでしょうか？それとも、キリストは数ある重要なもののうちのひとつになってしまっているのでしょうか？御子こそが最もすぐれたお方なのだと、私たちが認めているからこそ、私たちのすべての中心にこの方が存在しているのでしょうか？たとえば、私たちの持つ思いや願いも同じです。考えや態度も、私たちに与えられた時間や持ち物も、私たちの日々の歩みというものも、そのすべてがすぐれたキリストの下に置かれているものでしょうか？それとも実際のところは、自分自身やまた別の何かをそのキリストの上において、そのすべてがキリストよりも重要視されていたりしていないのでしょうか？御子はほかのどこでもない天から来られた偉大なお方でした。だからこそ、この方はますます盛んになり、私たちはますます衰えるべきだったのです。

2. 御子は目撃者であるお方 32－33節

次に、世に来られた御子に関する二つ目の事実は、御子は目撃者であるお方だということです。3章の続きを見てください。32－33節のところにこのようにありました。「：32 この方は見たこと、また聞いたことをあかしされるが、だれもそのあかしを受け入れない。：33 そのあかしを受け入れた者は、神は真実であるということに確認の印を押したのである。」と。当たり前には聞こえるかもしれませんが、たとえば私たちがいる歴史的な出来事について知りたいと思ったら、何をしましょう？本やネットで調べられることもできます。その研究をしている人に会いに行き質問することもできるかもしれませんが、でもその出来事を知る上で最も大切で、最も助けになるのは、その出来事を直接体験した人と話すことです。もちろんいろいろなところからたくさんの情報を手にはすることは今の時代もできます。でも時に、そこにはさまざまな人の考えや印象が入り込んでしまうこともあります。だからこそ、正確な情報を知

ろうとするのであれば、それを実際に経験した本人から直接話を聞くに越したことはないのです。御子はどこから来たお方でした？御子は天から来られたお方でした。この方はすべての初めからずっと天に住まわれていたお方でした。三位一体の神様として、父なる神とともに永遠に存在しておられた神の御子でした。それゆえに、この方が地上で話されたことはだれかから聞いた話ではありません。この方が夢に見たお話でもありません。そのすべてが実際に見た、実際に聞いたものとしての証言だったということです。イエス様の発したことばはすべて、神様ご自身のみこころ、神様からのことば、教えだったのです。

イエス様も同じ福音書の中で何度もこのように口にしておられました。ヨハネ 8 : 38 に「わたしは父のもとで見たことを話しています。」と言っておられます。少し飛んで 12 : 49 - 50 には「:49 わたしは、自分から話したのではありません。わたしを遣わした父ご自身が、わたしが何を言い、何を話すべきかをお命じになりました。:50 わたしは、父の命令が永遠のいのちであることを知っています。それゆえ、わたしが話していることは、父がわたしに言われたとおりを、そのままに話しているのです。」と書いています。上から来られた御子だけが、父なる神を知っているその御子だけが、天について、神様について、直接の目撃者としての証言を立てることができました。言いかえるなら、この証言以外のものはほかに何も要らないということです。私たちが天について知りたい、私たちが神様について知りたいと願うのであれば、私たちは別のものを頼りにする必要は何もありませんでした。この本の中に記されているすべてのことばこそ、最も権威のある、最も直接伝えられた神様の教えだったのです。そして、そのことを覚える時に、そのようにして天について、神様についてご自分が目にしたことを、耳にしたことをあかしすることのできる御子は、まさにすべての上におられる、すべてにまさって偉大な存在なのです。

▶「確認の印を押す」

そしてそのような偉大な御子を覚えるのであれば、私たちには二つのうちどちらかの応答が必ず問われるようになります。二つの応答しかありません。この方とこの方のなしたそのあかしを拒むのか、それともそのままそれを受け入れるのか、このどちらかです。戻って、3 : 33 に特にこんなふうに言われていました。「そのあかしを受け入れた者は、神は真実であるということに確認の印を押したのである。」、はっきりとこう書いていますよね？この当時の社会において、だれかが遺言書や契約書といった文書の内容に、完全に賛成したり、完全に同意したりする場合には、その証明として「確認の印」というものが押されました。これに似たようなことは、今の私たちもしています。何かの契約を交わすような際、私たちも書類に書かれている内容を読んで、そしてその内容に合意する意味で、最後にサインとか印鑑を押したりするのです。契約書は長いから、ささっと読んでしまうかもしれません。でも契約書の最後にサインをするというのは、そのすべての内容に合意するということです。わざわざそれを伝えるために、一番最後に「すべての内容に目を通しました」というチェックをする欄があることがあります。重要なのは、私たちがサインをする時、私たちが印を押す時、私たちは文書の一部だけに納得するのではなく、全部の内容に賛成する場合に限って、確認としての印を押すことが求められるということです。そして、これはまさに私たちが御子のあかしを受け入れる場合においても同じでした。

改めて考えてみてください。私たちは御子や御子が伝えたその証言の内容というものを、すべてそのまま受け入れているのでしょうか？イエス様のことばを聞くその時、一部分だけではなく、すべてに同意して印鑑を押しているのでしょうか。残念ながら、ある人たちは自分に都合の良い部分だけを切り取ったり、自分が納得したい、納得できる部分だけを切り取って、何ら問題ないと考えていたりします。私は神様は手にしたいです、でもこれまでの生き方をやめたくはありませんと。別に従いたくもないし、自分のやりたいことも願いも捨てたくありません、でも救い主を信じて救いが手に入るのであれば、天国に行くことができるのであれば、喜んで信じますと。そうやってイエス様を受け入れるための条件までも自分たちの側で勝手に決めてしまっていたりするのです。でもおかしいと思いませんか？私たちが何か

の契約をする時、その契約の内容を継ぎはぎして、「ここは消す、ここ消す、これでいいですね？」というふうにすることは絶対にしません。それと同じです。天から来られたイエス様は、そんな条件を語ってはおられませんでした。すべてのことには神様ご自身が定める条件がありました。振り返ってみても、救いに関しても、今見ている3章の中だけでもイエス様は口にされていました。3：3でイエス様自身が言われていました。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」と。5節でも「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国に入ることができません。」と言われていました。多くの人たちはそれ以外の方法を見出そうとします。でもそんなものはどこにもありませんでした。イエス様がそのように言われているのであれば、そのとおりに受け入れることが求められるのです。別の箇所でも同じです。イエス様ははっきりと人々に向かって言われていました。ルカ9：23-24にこう書いていました。「：23 イエスは、みなの方に言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。：24 自分のいのちを救おうと思う者は、それを失い、わたしのために自分のいのちを失う者は、それを救うのです。」と。これこそが実際に見たこと、聞いたことだけをあかしされるイエス様の語られたことばでした。これが真実である神様からのことばでした。単なることばではありません。天から、神から伝えられたことばなのです。

だとすると、ひとりひとりに問われるのは、そのことばを一部でも拒むのか、それともそのことばをそのまま受け入れるのか、どちらかです。決して忘れてはいけません。私たちがイエス様のどんなことばに耳を傾ける時も、どんな聖書のことばを聞く時も、私たちはそこに神様が語られることばを見ます。そしてそのことばに対して、大切なのは私たち自身がどう考えるのかではありません。私たち自身が納得するかどうかではありません。私たちが納得する部分だけを受け入れ、厳しい部分をまるでなかったかのように扱うのでもありません。私たちの唯一の責任は、そのすべてに心から同意して、そのままを受け入れることでした。神様から、私たちにことばが与えられていることを喜んで、それにそのまま確認の印を押して、私たちは素直に従っていくことが求められるのです。神様のあかしを立てることのできるお方、目撃者である御子だからこそです。この方はますます盛んになり、私たちはますます衰えるべきだったのです。

3. 御子はすべてを与えられたお方 34-35節

そして最後にもう一つ、世に来られた御子に関する三つ目の事実は、御子はすべてを与えられたお方だということです。続きをよく見てください。34-35節にこのように記されています。「：34 神がお遣わしになった方は、神のことばを話される。神が御霊を無限に与えられるからである。：35 父は御子を愛しておられ、万物を御子のお渡しになった。」と。御子のことを何よりも愛しておられる父なる神様は、ここで二つのものを特に御子に与えられていました。

▶「神が御霊を無限に与えられる」

一つ目に「神が御霊を無限に与えられる」とありました。これを読んで不思議な表現だと思った人もいるかもしれませんが、でも言われていたことは、実にシンプルなことでした。旧約の歴史を振り返ってみれば、そこには数多くの預言者たちがいました。エリヤやエレミヤやイザヤなど、神様から遣わされた彼らは、託された働きを果たすために必要な聖霊の力を与えられ、そしてその聖霊に動かされて民の間で神様のことばを忠実に語っていたのです。Ⅱペテロ1：21にこんなふうに書いていました。「……預言は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだからです。」と。そして確かにある預言者は、ほかの預言者よりもいろいろな働きをなしていました。ある預言者はほかの預言者よりも神様のことばを多く宣べ伝えて、大いに用いられていました。でも同時に、そんな彼らにも聖霊は無限には与えられてはいませんでした。彼らのことばや働きには限りがあったのです。ユダヤ人の文献『ラビ文献』の中にも一つこんなことばが残されています。「預言者

たちに宿った聖霊は、それぞれの預言者に与えられた任務の分量に応じて宿っていたのです。」と。つまり、どんなにすぐれた預言者にも限度がありました。これまで神様のことばをすべて語ることできる者はひとりとしていませんでした。しかし、イエス様は違ったのです。御子のうちには無限に御霊が注がれていました。それゆえにこの方だけが神様のことばを限りなく語ることができました。そしてそのことばこそ、間違いなくすべてが神様からのものであると完全に信頼することができたのです。

▶「万物を御子の手にお渡しになった」

またこれに加えて、二つ目にこう言われていました。「父は……万物を御子の手にお渡しになった」と。御子には御霊が無限に与えられていただけではありません。御子を愛されていた父なる神は、その手に万物を、文字どおりすべてのものをゆだねておられたと言うのです。実際、同じ福音書の中を見ていけば、より具体的に父が子に与えたすべてのものの中身の幾つかを見て取ることができます。例えば、さばきを行う権利もその一つでした。ヨハネ5：22、27にこう書いていました。「：22 また、父はだれをもさばかず、すべてのさばきを子にゆだねられました。：27 また、父はさばきを行う権を子に与えられました。」と。さばきを行う権利、それも御子の手のうちにありました。それだけではありません。いのちもそうでした。同じヨハネ5：26にも「それは、父がご自分のうちにいのちを持っておられるように、子にも、自分のうちにいのちを持つようにしてくださったからです。」と書いています。さばきを行う権利も、いのちもそうでした。またこれに加えて、人を支配する権威もその御手の中にありました。ヨハネ17：2にこう書いていました。「それは子が、あなたからいただいたすべての者に、永遠のいのちを与えるため、あなたは、すべての人を支配する権威を子にお与えになったからです。」と。

いま一度考えてみてください。果たして私たちは、この御子の偉大さを日々正しく覚えているでしょうか？先週も見ましたが、私たち自身はみんな恵みによって上から与えられたものの単なる管理者でした。でも御子はすべてのものの所有者でした。この方にはこの世のすべてのものをあらゆる状況をご自分の意のままにすることのできる力や権威があり、この方には死んだ者に与えることのできるいのちの源がありました。すべての人がこの方の支配のもとにあり、ここにいる私たちひとりひとりもみな例外なくこの方の御手の中で日々を生かされているのです。天から来られた御子は地から出たような私たちとは根本的に違っていました。御子イエス・キリストは父からすべてを与えられたお方だったのです。

そして、こんなにもすごいこの方の姿を覚えるのであれば、当然のように思いませんか？この方こそますます盛んになり、私たちはますます衰えなければならないと。この偉大な方の前に、今ふさわしく歩んでいるでしょうか？この偉大な方のすべてを、そのまま素直に受け入れて、この方とともに歩んで行くことができることを心から喜びながら、へりくだって感謝をささげて歩んでいるでしょうか？天から来られて、すべてを与えられた目撃者である御子イエス・キリスト。この方はほかと比較することなど決してできない、並ぶものも一つとしてない、圧倒的にすぐれたお方でした。この偉大な方を前にするのであれば、きょうあなたはどんな応答をするでしょうか？よく覚えておいてください。ここにいる私たちも含めてすべての人が、この方の前に必ず応答しなければいけません。そしてその応答は、何も考えずに適当になすべきものではありません。どうしてかと言うと、それはこの応答にはその人の永遠がかかっているからです。

○最高の約束への応答 36節

見てください、ヨハネ3章はこんなことばで締めくくられていました。36節「御子を信じる者は永遠のいのちを持つが、御子に聞き従わない者は、いのちを見ることがなく、神の怒りがその上にとどまる。」とあります。ある人にとっては、聞きたくない厳しいことばかもしれません。でもこれがいつまでも変わらないことのない神様からのことばでした。そして私たちには、これら以外の応答の仕方はありませんでした。もし偉大な御子を信じるという応答をするのであれば、そこには永遠のいのちを持つことができるという最高の約束がありました。ご自分のうちにいのちを持っておられるイエス様を愛して、そのこと

ばに聞き従って歩んで行くのであれば、今、この方とともに歩むことができるだけではありません。この先も、永遠をともにすることができるという、そんな揺るがない希望を持って生きていくことができるのです。

でも、もし偉大な御子を拒むという応答をするのであれば、そこにはいのちはありません。御父が愛されるその御子に関心を払おうとせず、自ら拒絶するのであれば、生まれながらに御怒りに値するそんな罪人の私たちを、御父が愛して送ってくださったその御子を自ら退けるのであれば、その者の上には当然神様の怒りが、永遠のさばきというものがそのまま留まり続けることになるのです。ウィリアム・バークレー先生もこんなふう述べていました。「大切なのは、人々がキリストにどのように応じるかです。その応答が愛と渴望であるならば、彼らは命を知ることになります。しかし無関心や敵意であるならば、彼らは死を知ることになるのです。これは神が彼らに御怒りを送るということではありません。彼ら自身が自分の身にその怒りを招いているのです。」と。だれもほかの人の代わりに応答してあげることにはできません。まただれも自分の応答をほかの人の責任にすることもできません。この応答はみなひとりひとりがなすそれぞれの責任でした。

だからこそ、もしこの中にまだ御子イエス・キリストを信じずに拒み続けている方がいるのであれば、どうかきょう、この偉大な方を素直にすべて認めて、心から信じ受け入れてください。神様に逆らって生きる、そんな罪人であるあなたにも救い主が必要です。あなたを汚れた罪から、御怒りから救い出してください、そんなあわれみ深い助け主があなたにも必要です。だからこそ、私たちのような罪人を愛してくださり、罪を贖うために天から来てくださったイエス・キリストを、かたくなに拒み続けないうでください。どうかきょう罪を悔い改めて、御子のすべてを信じ受け入れて、この方とのみことばに聞き従う者として歩んでください。その歩みにこそ、偉大な御子のうちにこそ、私たちの本当の救いが、本当の喜び、満足があります。どうかそのすごさを自分のこととして知ってください。

愛する皆さん、こんなにもすぐれたお方、最高の御子イエス・キリスト、この方はますます盛んにならなければいけません。そしてそんな方の前に、私たちはますます衰えなければいけないのです。でも感謝だと思いませんか？これほどまでに偉大なお方が、これほどまでに最高の御子が私たちの罪を背負って、十字架で亡くなるために、いのちをささげるために来てくださいました。私たちのために、この偉大なお方が大きな犠牲を払ってくださったのです。それだけではありません。この偉大なお方が私たちのことを知っていてくださるだけでなく、私たちといつまでもともにいてくださると約束してくださったのです。では私たちはどこを見るでしょう？もちろん弱い私たちは時に、この偉大な方の姿から目をそらしてしまって、それ以外のものに心がとらわれてしまうこともあるでしょう。でもそんな時こそ、この方のもとにすぐに立ち返って、思い出し続けることです。天から来られて、すべてを与えられた目撃者であるキリスト、この方こそどんな時も感謝と賛美と礼拝のみに値する偉大なお方でした。そんなすばらしい御子を心から愛して、この方の前にいつもへりくだって、そしてこの方とすることばとに喜んで聞き従う者として、今週もともに歩んでいきましょう。